



弔 辞

謹しんで長島弘三博士の御霊前に日本分析化学会を代表し、また多年変らぬ友情を頂く幸せを得た友人の一人としてお別れの言葉を申しあげます。

長島博士は国の内外を通じ鉱物分析に立脚する地球化学の第一人者であり、卓抜な分析化学者でありました。それは長島乙吉 弘三父子二代にわたる御研鑽の成果であると考えられます。

学問が家と町と国の伝統の中で育つ例を私共は海外に多く見るのでありますが、長島さんの場合は我が国における数少いその例であると思われます。

まず第一に長島さんは岐阜県苗木の御出身であります。この苗木こそ柴田雄次先生が木村健二郎先生とこの地で鉱物を採集され、「東洋産含希元素鉱物の化学的研究」として我が国の地球化学のスタートをされた地なのであります。

私が長島さんのお名前を始めてうかがったのは、木村先生の御講義においてでありました。すでにお父君乙吉氏のお名前は度々鉱物発見者としてうかがっておりましたが、さる年の春御講義の中で、長島さんの御令息が水戸高から化学科に入られたと御紹介があったのであります。

そして日ならずして私共は大きな期待と好奇心とをもって長島さんをお迎えしたのでありますが、眉目秀麗白哲の身ながら長島さんがすでに鉱物についての深い学識をもち、お父上ゆづりの強靱な探究心を備えた優秀な研究者であられることを私達が認識するのに多くの日時を必要とはしませんでした。

その後長島さんは東京農工大学、東大教養学部、そしてさらに再び東京大学理学部にもどられ一層研究を進められましたが、そのお仕事は鉱物学と化学を結ぶ余人の追隨を許さぬ分野の開拓でありました。そしてそこに私達は伝統に裏うちされた研究の強さを感じた次第であります。

後年お父上と連名で「日本希元素鉱物」を刊行され我が邦の希元素鉱物の産地と産状をあますところなく示されましたが、そこには我が国の全国にわたる鉱物関係者の多年の努力のつみかさねが見ら

れると感じたものでありました。

しかも、この御本の表紙は我が国の日本画の最高峯に立たれる前田青邨画伯の筆になる中津川苗木から仰いだ恵那山であり、この前田先生も中津川の御出身で御両親の御親戚であり、かつ長島さんの岳父に当る方なのであります。

東京教育大学、筑波大学に移られてからの長島さんの御活動は一層展開し鉱物合成に迄進み、さらにこの間関連のこととして多くの機器分析の開拓に向かわれました。最近年同研究室より生れた相関光音響分析法は我が国における近年の分析化学の特筆すべき顕著な業績であります。

長島さんは研究者としてこのように卓越した業績を上げられる一方、教育者としてきわめてすぐれた活動を進められました。

研究室の若手同僚あるいはメンバーの学生に対する温かみのあるそして綿密適切な御指導は、多数の俊秀を育てることとなりました。さらにそれと共に長島さんの教科書・参考書は名著の定評があり、いくつものベストセラーを生んだときいております。大学に対しては化学系の系長として、また分析センターのセンター長として大学行政に多大の貢献をされたことは、学長の御紹介の通りであります。また最近は大学入試センターにおいて枢要な地位を占められて全国レベルのお骨折りがあったと承っており、その困難な職責を卓越した学識・力倆とそれに何よりも余人に見ぬすぐれたお人柄をもって見事に果される御様子は、関係者がひとしく信頼し敬意を表するものであったと聞くのであります。

さらに御逝去に至るまでのここ数年は、会員一万を擁する日本分析化学会のために、関東支部長、ついで副会長の任にあたられ、また「分析化学」誌の編集委員長として年間数百篇に及ぶ論文の採録の責任に誠実に対応しておられました。

内にあってはこの上なく円満な立派な御家庭にめぐまれ、御成人の御令息御令嬢のお幸わせな状況を見定められ、いよいよこれからゆっくり好きな研究をし、令夫人と旅行でもしましょうといわれたのはつい先刻のことのように思うのでありますが、図らずも昨夏病を得られ、私共は愕然としてひたすら御回復を祈ったのでありますが、それも甲斐なく痛恨のきわみで悲しみにたえません。学界の損失、我々の落胆は申す言葉もないのです。

長島さんあなたと私は実験を御一緒に、苗木や石川や筑波や宝など沢山のフィールドを御一緒に、御一緒に本を書き、学会の仕事までずっと御一緒しました。あなたの御逝去は私には悲しみ以上に痛恨の極みです。

ただ立派なお仕事を沢山お残しになり、優秀な一門の方々、立派な御家庭の方々があることは私共にとって大きな支えであり希望であります。

どうかお心安らかにそして今後とも日本の学会、御一門、御一家の繁栄のためにお導きくださるようお願いいたします。

哀惜の心をこめおわかれの言葉といたします。

昭和 60 年 1 月 8 日

藤 原 鎮 男

*

*

本誌編集委員長 筑波大学教授 長島弘三博士には、本年 1 月 6 日逝去されました。本委員会はもとより、学会にとって大きな損失であります。

ここに御葬儀の際の本会会長 藤原鎮男教授による弔辞を掲げ、編集委員、編集課員一同深く哀悼の意を表します。なお、この弔辞は御遺族の御了解を得て掲載させていただきました。

「分析化学」編集委員会